

あとけないん 48 無邪気を
幼子(幼見)を 296
ミ

まだ 954^P
2079

胎中天皇より

初代

ニ

皇太后 紀上 348^P 13行
元149 先帝の皇后で、今上の生母

↑
摂政元年

明くる年(二〇一)の十月二日 群臣は

皇后も尊んで皇太后と申し上げた。「神

功皇后紀摂政元年十月二日条参照) 天皇

なおい、皇太后は、先帝の皇后で今上の

生母のことである。(広辞苑へ皇太后参照)

仲哀天皇が薨去され、長子が二代目の

仲哀天皇として王位に上られたため、この

新たな仲哀天皇の母は、皇太后と呼ばれ

ることになったのである。と推測される。

だが、二代目の仲哀天皇は政治をとるに

は未だあまりにも幼なすぎた。記述する

そこで皇太后以下皇后と称す)は二

代目の仲哀天皇に代わって政治をつかさどろ

う、とお思いになった。つまり、二代目の仲哀天皇が、無邪気な幼

子だったのだから、生母である息長足姫尊は

摂政となり、政治を行なうことにされた

のであろう。仲哀天皇の皇后として

この年は、すなわち摂政元年である

955P (と) 紙順 239 70才 69年 269 100才 授政年 201 32才 68 68 68 記(国)183 紀上 360

12/17
12/16

ということになる。

*

という(神功皇后紀撰政元年条の末尾参照)と日本書紀は記す。
予め述べると、神功皇后の享年について、
神功皇后紀撰政六十九年(二六九)条に、
「百歳し
仲哀記分注にも、「皇后御年一百歳崩し
とある。
したがって、逆算すると、
神功皇后が「撰政」の位につかれたのは
神功皇后撰政元年(二〇一)、御年三十二歳
の時のことであつた

紀上 330 131

58

おもむく 思惑 330
たぐみ 巧に 1365
まじり 惑 2088

大王と皇子と
3825 956
917P

こうみょう 巧妙 759P
3825 1871P 3826 1/2に同文
4779 125 紀上362 976-3/4 紀上348 4779

二代目の仲哀天皇、皇太子とされる

少々奇異な感もあるが

①神功皇后摂政三年（二〇三）正月三日

あじけなひ二代目の仲哀天皇は天子の位を

解かれて、日嗣を受け継ぐ

御子、すなわち皇太子とされた。

②そしてこの皇太子は、去来抄別尊に「譽

田別皇子の元の名」と呼ばれた、

と考えてみた（後述）

本書の編纂者は実に巧妙に、こう記述している。

三年の春正月の丙戌の朔戊子に、譽田別

皇子を立て、皇太子としたまふ

なるほど詳細が隠されているとして

誤っているとはいえないわけである

そこで、後代の読者はこの巧みな文言に惑

わされ、編者の思惑通り「字句そのままた

三年正月三日、仲哀天皇の皇子（にすぎ

なかつた）譽田別皇子が、皇太子とされた

と早読み込み、いさように思われる。

それでは、去来抄別尊に「その名を何

紀上348 新行
均等

小冊 900P
⑦ 994

前2頁3行
神功聖武 69年 (269)
百歳

三韓 2533P
⑤

②④

957P

② 2600P

時、
日 譽田別尊と改名されたのであろう
か。
物語において

うまでもなくそれは定かでないが、この
西暦二七〇年 神功皇后が百歳となり、攝政の位
を返上された二六九年の翌年に即位された応神天皇

へ去來紗別尊は、
辛卯年 (三三一)

に三韓 (新羅・百濟・高句麗) を打ち破り、
その二年後の三三三年に名を改め、
名告ることにされたのであろう

と仮定したい。(第一表参照) 第四十一章

へ三韓征討。第四十三章へ去來紗別から譽
田別への改名の項において詳述

よう

また、「去來紗別尊」
「譽田別尊」は、

時として、日月読尊と呼ばれたのであろう

と考えてみたい。

* なお、日読尊も、日譽尊も、共にヨミ

と訓める

大分 2045
訓む

*

え 69P
あらた
へと改めら

え 128P
いつ
は、何時だったのだ

958^P-3/2

⑧830^P-1/2

OK

先述の通り

■なお

中国の文献に

倭面上國王師升

倭面上國王師升

面國^{OK}と記されている

九章へ後漢へ再び朝貢の項において既述

通である。

*

H30(2018)2.7(木)~2.9(4回)
令和元(2019)5.16(木)~5.16(3回)

959P

云
2339P

紀上86P
紀小63P

小さい 大272810P
雷 があるが、雲は無い。

F5/16
5/16

く 育っていった。
■ 最年長女 長女の天照大日靈女貴(やかて
二代目の天照大神となる)は、光うるわしく
輝いて天地四方に照り徹るばかりの美さだった。かも
靈異な能力をお持ちであつた。
■ 長男である月読尊(つきよみのみこと)は、
は、日についでうるわしく成人さへた。
■ 次男である素戔鳴尊(すさのみのみこと)も、
みるからにたくま
しく、たのもしくお見うけさへた。

西970⁸₈ 854²₂₀₃₇ 中區島賊津 962¹₁₃₀

HL

$n \pm 2447$
 $n \pm 2447$

凡±記 458^p 前頁「好」が變日。
次頁「竹」が是小

「中臣氏系図」天見屋根命の五世孫に伊賀

津臣とあるのと同人である

と説示されている。(「風土記」日本古典文

学大系、岩波書店、四五七頁、注三七参照。

追って詳述)

* な お 考 考 ま で に 述 べ る と 、 伊 香 刀 美 に ついて

糸
参
照
(
7
近
江
国
風
土
記
逸
文
L
八
伊
香
小
江
V
冬

て
り
た
。 
駿河
国
風土
記
逸文
L
八三
保松
原

神女は天羽衣を松の枝に曝して浴衣

香
小
江
条
参
照
掛
け
て
垂
ら
し
下

女
人
ウ
ア
た
。
近
江
国
風
土
記
逸
文
伊

ミホより少し後に二代目の神功皇后となる

と疑
つて
往
きて
見る
に
実
に
是
水
は
神
人

〓
 ある
 いは
 是
 れ
 は
 神
 人
 で
 あ
 う
 う
 か
 〓

若しかたら

の全文

小江条を引き写して、近江国風土記逸文、伊香

郡、古老の傳へて曰く、近江の國伊香の

南にあり。天のハセ、俱に白鳥と爲りて、天

香刀美、西の山にありて、遙かに白鳥を見るに

其の形奇異し。因りて若し是れ神人かと疑ひ

て、往きて見るに、實に是れ神人なりき。こ

こに、伊香刀美、即て感愛を生じて得て還り去

らず。竊かに白き犬を遣りて、天羽衣を盗み

取らしめ、世に弟一人の天女中の最も年少

の天女、乃ち知り

ぬ。其の兄七人は天上に飛び昇るに、其の弟

一人は得飛び去らず。天路永く塞いて、即ち

地民と爲りき。天女の浴み、浦を、今、神の

浦と謂ふ、是なり。伊香刀美、天女の弟と

天上の人に対する地上の人間

天上の人に対する地上の人間

天上の人に対する地上の人間

天上の人に対する地上の人間

960-15

に「^{なかとみの}大夫中臣^が鳥賊津^{つのむら}連」^いとあり。下

コクヨ ケー20 20×20

伊香連の祖次郎 912 1/2 1/2 1/2 133

~~972² - 1/2 249~~

3191P
972

968P-3/3
天照主命 60+78P
天照主命 26P

961P-3/3

天照主命 紀元12P 16 興 天照主命
969P

第21表参照

中臣鳥賊津使主^{なかとみのいかづの}と^{おみ}な^たつたの^であ^らう^うぐ^{（以下}

またぐあえて述^たべるとぐ

二^{ふた}代^{だい}目^めの神功皇后^{じんこうこうごう}（卑彌呼^{ひみこ}）の夫^い君^{きみ}あ^た

た伊香刀美^{いかうたみ}（大夫中臣鳥賊津使主^{たいふなかとみのいかづの}）は、

後年^{こうねん}、特^{とく}に^{（以下}天見屋命^{あまのいやはのみこと}とも呼^よばれ^{（以下}敬^{うやまつ}

われたのであろう

と想像^{そうぞう}さ^る。

後^{こう}代^{だい}の中^{なかとみの}臣^{むすめ}連^{むらじ}の遠祖^{えんそ}と記^しされて^{（以下}天見屋命^{あまのいやはのみこと}

に「天^{あま}」という字^いが冠^{かん}せられて^{（以下}いること^{（以下}から

見て「天見屋命^{あまのいやはのみこと}」はよほど皇^み室^{むろ}と深^{ふか}い関^{かん}

係^{けい}にあつたのだらう、と推察^{すいさつ}される。

ともあれ、物語^{ものがたり}では

伊香刀美^{いかうたみ}（伊賀津臣^{いがかづの}、天見屋命^{あまのいやはのみこと}）は

大日靈貴^{おおひるめのみこと}（故^{ゆえ}あつて、やがて二^{ふた}代^{だい}目^めの天^{あま}

照大神^{てらすおほみかみ}となり、天御中主尊^{あまのみなかつのみこと}とも尊称^{そんしょう}されたの

であらう）を娶^{めと}つて、四人^{よににん}の子^こ供^{ども}

（男^{おとこ}の子^こ二人^{ふたり}、せの子^こ二人^{ふたり}）をもうけた

と考^{かんが}え^{（以下}アミを^{（以下}との間^{あいた}に生^うまれた

伊香刀美^{いかうたみ}と天照大日靈貴^{あまてらすおほひるめのみこと}子^こ供^{ども}

達^{たち}についで、こう仮定^{かりてい}したい。

968⁺-1/3 150G
962^p
962⁺
第21表 中臣氏系図(想像)

右頁に大きく掲載下さい。
できるだけ大きいゴチで入力下さい。

961⁺-3/8 179
大夫紀上28⁺8
たいふなかとみのりか つかのおみ むらじ
大夫中臣鳥賊津使主(連)
ちゅうあい 仲哀天皇

いかとみ
伊香刀美
つかのおみ
伊賀津臣
ほに
伊賀失押
あまのこみ
天見奉命
たいふなかとみ
大夫中臣鳥賊津使主
たいふなかとみ
大夫難斗米 (神功攝政39年系)

961⁺-3/8 179
大夫紀上28⁺8
親老後49⁺10
紀(上)351⁺

いぐう
二代目の神功皇后(娘)
二代目の天照大神
二代目の天御中主尊
うみ
卑彌呼
おほひるめのむち
大日靈貴

いぐう
初代神功皇后(母)
あまてらすおほみかみ
初代天照大神
あまのなかつみのみこと
初代天御中主尊
あまのなかつみのみこと
皇神之御中皇

963⁺-1/2 79

912⁺-1/2 94
962⁺-1/3 204

なこりひめ
次女 奈是理比賣
いさい字

そうは
長女(宗女) 伊是理比咩
とに
臺舉 (宋本太平御覧)
たにひめ
田心女臣
いぐう
三代目の神功皇后
あまてらすおほみかみ
三代目の天照大神

親老後53⁺

なしとみ
次男 那志登美
いさい字
なしつか
梨津臣
なしつか
梨富命

912⁺-1/2 494

いぐう
長男 貴美夫(孫)
いさい字
つかのおみ
伊賀津臣
ほに
伊賀失押
あまのこみ
天見奉命
たいふなかとみ
大夫中臣鳥賊津使主

962⁺-2/3 39

均華
ときは
常磐
はいめなかとみ
(始て中臣の連姓を賜う)
たまる
上
ようめい
用明2年(587)4月に斬殺

いけらのかまたり
藤原鎌足
なかとみのかみ
(中臣鎌子)

同文 561¹² 79 同文 319⁴ 968³ 963¹

972¹-1/2 11 319²

561¹² 79 968¹

①長男 日 意美志留^{おみしる}は、父^{ちち}の名^なと地位^{ちい}と年^{とし}とを継^ついで、大夫^{たいふ}中臣^{なかつみ}鳥賊^{うさく}津^つ使^し主^{ぬし}とな^なった。

中臣^{なかつみ}氏の^し本家^{ほんけ}筋^{すぢ}は滅^{ほろ}んで、用明^{ようめい}二年^{にんねん}（五八七）四月^{しがつ}年条^{ねんじょう}。第一^{だいいち}卷^{まき}末^{すえ}尾^びの^の「年表^{ねんひょう}」へ用明^{ようめい}二年^{にんねん}四月^{しがつ}参^{まゐ}照^{しょう}。

②次男^{じなん} 日 那志^{なし}登美^{とみ}心^{しん}（梨津^{なしつ}臣^{しん}・梨富^{なしとみ}命^{のみこと}ともある）の子孫^{こそん}は、本家^{ほんけ}筋^{すぢ}が滅^{ほろ}んだ後^{のち}、朝廷^{てうてい}に仕^{つか}えることと^とな^なった。た^たよう^{よう}だ^だ。

曾祖^{そうそ}父^ふ常磐^{じょうばん}に^につ^ついて、こう記^きされ^れて^てい^いる。

日 始^{はじ}賜^{たま}中臣^{なかつみ}連^{れん}姓^{せい}に^にな^なる。

とある^{とある}で、そこ^{そこ}で、古^{ふる}来^{らい}の^の中臣^{なかつみ}氏の^し嫡系^{てくけい}は^は仏教^{ぶつぎょう}受^う容^{よう}に^に反^{はん}対^{たい}し、滅^{ほろ}び、常磐^{じょうばん}ら^らが^が傍系^{ぼうけい}から^{から}入^いっ^て継^ついだ^た。

と^とする^{する}説^{せつ}が^があ^ある。

（「日本書紀^{にっぽんしよき}」上^{じやう}）日本^{にっぽん}古^こ典^{てん}文^{ぶん}学^{がく}大系^{たいけい}、岩波^{いわなみ}書店^{しやうてん}、五^ご六^{ろく}一^{いつ}頁^{ぺい}、補注^{ほしゆ}一^{いつ}七^{しち}九^く参^{さん}照^{しょう}）

美^みの^の血^ち筋^{すぢ}を^を引^ひい^いて^てい^いる^るの^ので^であ^あら^らう。

藤原^{ふじわら}鎌足^{かまたり}（中臣^{なかつみ}鎌子^{かまこ}）は、那志^{なし}登^{とみ}。

961² 319

961^p-3/4 457

963^p

964^p

ト(90)
臺舉

7973^p12 詳い

紀下 150^p

紀下 150^p 注3
紀下 159^p 新稿

同文
972^p 1/2

④ 次女の日奈是理比賣^{ヒメ}については「詳らかでない」。

と推察される。(第1表参照)
いかに、ここで詳しく述べると極めて煩雑になる。
もっと多方面から、おいおい検討してゆく

③ 宗女(長女)の曰臺舉^{トコタケ}は、
平御覽に臺舉とあるは、
(二代目の天照大神)が蒙去されたのち、天
石室の儀式によって、三代目の天照大神(三
代目の神功皇后)になられたのであろう。

という。
注三参照)

(四) 一方、岩波書店、四五八頁注九。第2表参照
中臣勝海連の名前は、中臣氏系図に
引く延喜本系図に見えない。(「日本書紀」
(中) 日本古典文学大系、岩波書店、一五〇頁

・ 中臣氏の系図に、伊賀津臣の子「梨津臣」
と記されている。(「風土記」日本古典文学
大系、岩波書店、四五八頁注九。第2表参照)

天香中論 78 原 記茶 220^p
大電仲 記(里) 43^p

965^P

「史料にある跡の歩み」267 (17) 大岡川 1787
者 ^て _り 大岡川 1786 続 (5)
大岡川 ^て _り 「とさへり」のり ④ - 276?
銚子

$\frac{1}{2}$ 和初初中終
 上 610^P 仲夜程 初大天理(組)
 中 巨島賊津日 仲夜二介自瑞明(地)

伊賀志村(中書)
伊賀志村臣
伊賀志村臣

中臣氏の祖について、別々の角度からみてみよう。

興味深いことに、中臣氏系図の引く延喜本系に、こう記されている。
「東詠玄天平宝字五年撰氏族志所宣勘造新進本系帳云」高天原初而皇神元御中皇、御孫え御中執持々伊賀志村不領、本末中良布留人、称え中臣者」とある。

↑ ↑ ↑
「日本書紀」(上) 日本古史とある。

文学大系、岩波書店、五六一頁補注一七九・あるいは、伊賀志村(伊賀志房・伊賀津臣か)は、

中臣氏の祖先……高天原を治められた皇神元御中皇「やその子系の中を執り持つて仲らひ」梅木たけ後の意か」を行なっていた。『日本書紀の冒頭に記載されている』
「祭祀の情况が述べられていこのかみ知れないう。」
またもーかたら「御中皇」とは「天御中主尊のこ」とであつて、「天照大神(ハルノミコト功皇后)」を投影した神なのであろう、と考えられている。

なお、二代目の「天照大神」と「伊香刀美」

二人の男の子のうち
どちらとも記さない

との間に生れた男の子の子孫か、――後代の

中臣氏であるとするは、――すなわち

へ後代の中臣氏の祖先は、天照大神であ

る

ということになる (第21表参照)

一方、神代紀上第七段一書第三には、

「中臣連の遠祖興台産靈が兒天兒屋命」

とある。

へ天兒屋命 (伊香刀美) の親 (母親) は

代目かの先祖は、興台産靈であつた

ようにも解さるが、詳しくは分らない。

「日本書紀」(上) 日本古典文学大系、岩波書店

一七頁、注一八参照

*

初代神功皇后 200年、新羅征伐の後、伊勢で石を除去し去られた
二代目の仲哀天皇を

紀上
112
89

③3198^p
 津田は1世代20~25年
 井上1世代20年
 中臣本家初の世は19才か? ④968-³/₂
 宇佐氏の世代は ④4, 10, 26 ④11
 17才 ③3199^p

③3194^p 745^p - 200
 ④962-²/₃ 450
 ④961-¹/₂ 340
 ④968-²/₃ 1151
 ④968-²/₃ 1151
 ④968-²/₃ 1151

うろうろ
 考えるても
 的はずれではなさそう

とある。(「神皇正統記」増鏡「日本古典文
 学大系、岩波書店、九七頁注十八参照」)
 ●天兒屋命(二〇〇頃)から藤原鎌足(六一
 四〇六六九)までを約四四〇年間と考える
 と、
 (一)二十一世の場合には、一世代約二十一歳、
 (二)二十三世の場合には、一世代約十九歳、
 となる。
 ●「天兒屋命」(「中臣鳥賊津使主」伊香刀
 美)「次男」那志登美「常磐」可
 多能祐「御食子」藤原鎌足
 と続く中臣の傍系筋の一世代は、十九し二十
 一歳だったのかも知れない。
 参考資料に求むると、津田左右吉氏は、世代
 の年数を二十し二十五年と考へ、井上光貞氏
 は、一世代を二十年と考へてゐる。(「神
 武東遷」安本美典、中公新書、一四〇し一四
 一頁参照)
 ●ともあれ、
 天兒屋命は紀元二〇〇年頃の人であつた

④961-¹/₂ 340
 ④968-²/₃ 1151
 ④968-²/₃ 1151

天見屋命へ西暦二〇〇年頃の伊賀(美)も合
仲哀朝ころから以降、用明二年(五八七)四
月に至るまであつと、伊賀津臣』という名
が継承されていつたのかも知れない。
新撰
また、姓氏録、左京皇別、中臣志斐連の系
以下諸所によると、
「天見屋命の九、十一、十四世は、雷大臣
と呼ばれた」
ようである。
この雷大臣は、中臣氏系図や尊卑
分脈に天見屋命の五世孫としてみえる。伊賀
津臣命』と同一人であらう、という。(「日
本書紀」(上)日本古典文学大系、岩波書店、六
一〇頁補注ハ一六参照)
だが、仲哀朝以降代々続いていつた伊賀津
臣』らのうち、九、十一、十四世は大臣とな
り、
「イカツ」をもいつて「イカツ
チ」と呼ばれ、日雷大臣』と称されたのであ
らうと推察される。(「広辞苑」へ雷』参照)
イカ(厳ツ(助詞)イ(霊)の意)

3/8 8°15' 木 3/6 木
 ②は、965P
 29P

「とこうで」
 ③ 948P-1/2
 ④ 987P

1666
 969P-2/4
 改正

我が国の
 元朝や明朝にとどまらず、更にその後
 までも引き継がれていったように思われる。
 なるほど、こうした風習がいつまで続いたの
 かは明瞭でないが、しかし恐らく、壬申
 乱（六七二）以降においても未だ、廃止されていな
 かったのだらうと推測される。（第八十五章において詳述）
 たたとえば、倭の五王（実は六王と解すべきで
 あらう）中の「讃」が中国へ朝貢した年代を
 見てみると、第一表に示すとおり、仁
 徳天皇とその長男である履中天皇が、丁度該
 当する。この二人の天皇は、もとより同一名
 を名告つておられたのかも知れない。
 一か、後代、一応神天皇以前に比べ、仁徳
 天皇以降の各天皇が極めて短命であつたことが
 ることから推しはかると、仁徳天皇の御世ま
 で遡り、一曰、一天皇、一世代と限
 定して考えるようになったのであらう、と想
 到される。（第一表参照）

＊

たろつて
 なる3行

HV

(イ) 越後随一の大地主 伊藤友吉は、江戸時
 放映 十五分、ABCテレビ「あまから空と海」
 する。↑↑平成元年七月一日、午前十一時
 姓と名を継いで、山村新治郎を名乗って、
 次官の家では、現在もなお、先祖代々の
 (ロ) 千葉県佐原市の米穀商、山村新治郎(ヨ
 ト号ハイジャック事件で知られる運輸政務
 六) にはトまる。(「広辞苑」参照)
 称名である。三代友信(一六四七-一七〇
 (ハ) 日 佳友吉左衛門は、佳友家当主代々の通
 ている例をあげてみよう。
 ・ 格式を重んずる名家が、代毎に「襲名」
 露 華やかに催されていく。
 ・ 歌舞伎役者、落語家などの盛大な「襲名披露」
 の儀式を執り行うようになったようだ。
 襲名 一般庶民さえも「襲名」
 襲名 襲名の儀式は「皇室から始まり、朝臣
 へ広がったのだろう」
 襲名 襲名

天つき
改行

969^P-4/4

H24.1.16 ㊦

14
下 8/23
8/23

HL
トル

代々中期以降「代々」この名を継いできた。
た土地は伊藤家から離れた明治十五年か
ら八年がかりで建てられた伊藤家の豪壮な
本邸は、敷地ハハ〇〇坪、建坪一〇〇坪
部屋数六五を数える純日本式住居で、昭和
二十一年遺構保存のため、財団法人北方
文化博物館が創設され、これへ全部寄附
された。「越後随一の豪農の姿を今に伝え
る」館の豪農の館は北方文化博物館、パン
フレットや「豪農の館」角田夏夫、平成六
年三月三日第九刷発行、六十九頁へ系図・
他参照
という。相撲界においても「襲名」を行な
う。
「立行司木村庄之助」や立行司式守伊え助は、
代々襲名して「三」という。「広辞苑」
朝日新聞、平成二十四年九月二十八日付へ39
代式守伊え助、九州場所「襲名」参照

凡士記 261^P

うるめ

愛し 219^P

愛し 978^P

970

P 例 586の地図わじろ

風土記 457

地名 168^P

風土記 961-1/2

960-1/2

地名 305^P

初天 伊香刀

伊香刀

207^P

初天 伊香刀

伊香刀

207^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

728^P

風土記 458^b 注 8
④ 961^b - 3/2 49

① 961-²/₃

果の略に 紀上87の1行
ミたび 是の行は 紀上80
末5行

972 P-7/2

ひ うつ
引主写す 名 1853⁹
次頁 1行あるいは

「さて」 P-7/2
紀上53⁹ 945-7/2
① 988 P

次頁
から

似て 伊是へ理しと「壹與」の音は、かなり
いさうか。

千余人が戦死するほどの内乱が勃発した後の二
と「復た卑彌呼の宗女壹與年十三なるを立
て王と爲し、國中遂に定まる」と書いて
と述べている。
「あるいはもともと「臺舉」と書か
たにもかかわらず、魏略も「壹與」と書
す際、誤って「壹與」と書いてしまったの
であらうか。

小林 428P
962P-3/3
おみ 小村 892P
おみ 小村 187P

962P
宋本太平御覽には「臺與」とある
梁書・北史には「臺與」と記されりるが
臺與を書記誤ったのであろうか
また魏志倭人伝には「邪馬壹國」とある
通常「邪馬臺國」の誤りと考えられりる。
一方「伊」および「尹」の字は「タダ」と
訓める。「伊」の字は「タダ」と
また「伊達」(日本姓藤原)と書いて「タ

973P
961P-3/3
伊 93P (副詞凡例の6頁)
伊 652P 後注40注3 後注54P

268P
105P
140P 122P
204P
「だ」ではない。
天照大神(神功皇后)の御世が「田心姫」・「市杵嶋姫」という順序で次

臺與 (イヂヨ) や 臺與 (イコ) 臺與 (トコタコ) 臺與 (イコ)

ない。第一章「伊香乃美」の項へ崇世(長女)の「臺與」を参照
理比咩(イヂメ) 臺與と解釈すべきなのかも知れ

宋本太平御覽には「臺與」とある (岩波文庫四三七の五十四頁に注二参照)

梁書・北史には「臺與」と記されりるが
臺與を書記誤ったのであろうか

また魏志倭人伝には「邪馬壹國」とある
通常「邪馬臺國」の誤りと考えられりる。

一方「伊」および「尹」の字は「タダ」と
訓める。「伊」の字は「タダ」と

また「伊達」(日本姓藤原)と書いて「タ
テ」と読む。「伊」の字は「タ」又は「タ

とも訓まわっていたのであろうか。第十二章「伊香乃美」
の項にあり(既述)

倭人が「伊是理」と言ったのを、中国人が「臺
與」と書きとめたように想像される。第21表参照

天照大神がお生みになった御子は
田心姫・「瑞津姫」・「市杵嶋姫」の三

女神である。(神代紀参照)

天照大神(神功皇后)の御世が「田心姫」・「市杵嶋姫」という順序で次
敏達紀五年三月条「聖徳太子」坂本太郎吉川弘文館二〇四頁参照)

敏達紀五年三月条「聖徳太子」坂本太郎吉川弘文館二〇四頁参照)

248年一毫 13才
 239年4月 魏入朝 (4人の3行) 距目49
 令和元(2019)12.18 12.20 (4回) 961
 宗智 6720

974
 53

249 13
 237 1
 12 12
 天つぎ
 972-725
 かき知らない 2分
 のはながうか
 魏志 53 12行
 から 2分

12/20 12/19

引き継がれていった経過を示唆している
 ように思われる。(第一表参照)
 ●なお
 卑彌呼死去(二四八か)の翌年(二四九)
 臺舉が十三歳で王に爲つた(魏志倭人伝参照)
 と仮定すると、――臺舉は、二二七年に生
 まれたこととなる。
 *
 (男の子二人とせの子二人)
 愛くるしい子供達に囲まれて、――伊香刀
 美と天照大日靈尊は幸せだった。
 平凡な暮らしのうちに日々が過ぎて
 いった。
 ●そんな慌しくも平凡な暮らしの日々が下
 ち過ぎていった。

から 2分

671

269年 100才
 237 68
 200 31
 269-100才
 -200 31
 69 69
 269-100才
 237-68才
 32 32
 975-1/2
 41P
 238年(977)
 269年 100才
 248 79才
 239年 70才
 26才
 13才 249年
 -1 -237年
 12 12

初代神功皇后崩

それは、↑↑↑↑何時だったのだらうか。

あるいは、二代目の神功皇后が魏国へ

朝貢する二三年直前の、二二七年頃

のことであつたかも知れない。

ともあれ大日靈貴が長女(宗女)伊是理比賣を出産

したのは引き続き妹の奈是理比賣をみご

もない頃(次女の奈是理比賣をみごもつた直後

ころ)のことなのだらうと思われ。

倭国の女王「日御子」

の激務を全うされた皇太后(初代天照大

神・初代神功皇后)が、娘(二代目の神

功皇后)等を残して、お隠れになつた。

参考迄に述べると、神功皇后紀末尾に、

「六十九年(二六九)四月十七日、皇太

后、相桜宮に崩りまゐぬ。時に年一百歳

とある。

初代の神功皇后は、逆算して、

二〇〇年、三一歳の時に長韓征討を行われ

と(二二七)年、六八歳の時に崩御された

と考へてみた。(二六九年に百歳から逆算)

975^p-3/2

紀上344^p末
345^p18

なす
嘆く 元
1655

紀上326¹

(神功皇后紀攝政元年二月条参照)

*

眼^ま炎^かく^や金^{かね}・銀^{ぎん}・彩色^{さいしき}多^{おほ}に満^みちた^み日^ひ狗^く邪^や韓^{かん}
國^{くに}を^を得^えられ^えた^たばかりか^か倭^わ國^{くに}にか^かつ^つて^てな^なか
つ^つた^たほ^ほど^どの^の平^{へい}安^{あん}の^の時^{とき}を^をも^もた^たら^らさ^さ小^こた^た(初^し代^{だい}の^の
神^{しん}功^{こう}皇^{こう}后^{こう}か^かお^お隠^{かく}れ^れに^にな^なつ^つて^てし^しま^まわ^われ^れて^て—
人^{ひと}々^々は^は母^{はは}を^をそ^そく^くし^した^たよ^よう^うに^に嘆^{なげ}き^き悲^{かな}し^しん^んだ^だ
倭^わ國^{くに}中^{ちゆう}の^の人^{ひと}々^々は^は
登^{のぼ}さ^さえ^え夜^よの^のよ^うに^に暗^{くら}く^く思^{おも}え^てし^しか^かた^たが^がな^{ない}
ま^まる^るで^で常^{じょう}夜^やを^を行^かく^くよ^うだ^だ
と^とい^いつ^つて^て途^と方^{ほう}に^にく^くれ^れ女^め王^{おう}日^ひ御^{のみ}子^こを^を慕^もつ^つた^た